

『星を泳ぐサカナ』

著:朝丘 戻

ill: 葛西リカコ

『潮騒』のバックルームには、ガラス窓がひとつある。

四角く切りとられた外の景色はすっかり冬模様で、鈍(にび)色(いろ)の空と細長い木の枝がもの悲しい。

風に揺らぐ葉を眺めてエプロンを身につけていると、

「よ、優太郎」

と本田さんが出勤してきた。

頭をさげて、僕もにこり挨拶する。

「こんにちは」

微(ほほ)笑(え)み返してくれた本田さんは、出入りぐちの傍(そば)にある自分のロッカーまえで鞆(かばん)をおろした。ロッカー扉ふたつぶんの距離をおいて横に立つ。

彼の赤く冷えた指先が気になる。

「優太郎もいまきたところ？」

「はい。外、寒かったですね」

「寒かったな～……」

頷いてエプロンに腕をとおした本田さんが、腰の紐を適当にリボン結びしながら目をうっすら細めて、イタズラっぽく微笑した。

「……優太郎、鼻の頭赤いよ。泣きはらした子どもみたい」

「えっ」

焦って左手で鼻先を撫(な)でていたら、彼はおかしそうに笑って店へ行ってしまった。

ロッカー扉の内側についてる鏡を覗(のぞ)きこんでみたけど、さほど赤くなんてない。

嘘つき、と心のなかで憤慨しながらも、こういうしょうもない嘘で僕をからかう彼に、しようもなく、揺さぶられる。今日も。

ふと息をついて支度を終え、僕もバックルームと繋がるカウンターへ入った。

店はあまりひろくもなく、バックルームから見てまっすぐのびたカウンターには、レジみつつ。真正面に店の出入りぐち。左手にDVDとCDのレンタル棚がずらっと整列している。

お客も店員もいないな……と不思議に思っで見まわしていると、すぐに声をかけられた。

「坂見君、きてたの？ おつかれ～」

「あ、ハルちゃん、おつかれさま」

棚のあいだから近づいてきたのは、春(はる)野(の)照(てる)明(あき)さんことハルちゃん。

この一年半のうちに起きた大きな変化と言え、ハルちゃんが店員として加わったことだ。

現在二十九歳で、ひきこもりの執筆業の傍(かたわ)ら、人と会って話す時間を保ちたくて働くことにしたとか。大人の男相手に“ちゃん”づけで呼ばせてもらってるのは

『坂見君にはかわいく呼ばれたい』との本人希望によるもの。作家さんってやっぱりすこし変わり者なのかなと思う。

「ねえ、坂見君。……本田君、今日も格好いいね？」

カウンター越しに身を寄せて、にんまり耳うちされた。

「し、仕事してください」

「照れちゃって」

……そしてこのハルちゃんだけが、僕の密(ひそ)かな片想いを初めて見破った人だった。

「坂見君。顔の善し悪しも、文才や画才と同じ、才能のひとつなんだよ」

「才能……？」

「そう。才能には限界がある。どれだけがんばっても、才能のない人は才能のある人に勝てない。才能があっても、もっと優れた才能のある人には勝てない。僕もスポーツはてんで駄目だった。絵心もない。学生時代、体育と美術の成績はずっと悪かったよ」

「う、うん……」

大げさに、はあと溜息をついたハルちゃんが、ぱっちり笑顔に戻って続けた。

「欲しいと願えば手に入るものじゃなくて、生まれた瞬間から持っているのが才能だとすると、容姿の美しさも才能と同じでしょ？ だからすてきだと思ったら褒(ほ)めてあげなくちゃ。ってことで、ほら、本田君のとこいっておいで」

ハルちゃんには語り癖がある。スイッチが入った途端ばらばら話し始める内容は、難しすぎて理解しづらいときもあったけど、常にアンテナをはってささいな事柄を深く追究しようとする旺(おう)盛(せい)さや、感性の鋭さには驚かされた。

が、こういうのは困る。

「大声で名前を言わないでよ、ハルちゃん」

「ほんだくん、ほんだくん、ほんだくん」

左耳を軽く引っ張って反撃してやった。

「いたい、いたいっ。……一年以上も片想いしてるなんて知ったら、いじりたくなるのが道理でしょうが。告白しなよ。男同士だっていいじゃない」

「そんなふうにするのは、ハルちゃんぐらいたよ」

「自分だけ名前と呼ばれてるくせに一。昨日も呑みにいったら、坂見君の話ばかりしてたよ」

「呑み、って……」

ハルちゃんがきてから『潮騒』の雰囲気は変わった。

これまではみんなあくまでバイト仲間としての事務的な関係でいたのに、ハルちゃんがプライベートまで突っ込んで訊くせいで、いつしか全員の私生活や趣味や、食べものの好き嫌いや、いま欲しいものまで自然と知るようになった。

僕自身も、大人っぽすぎて萎(い)縮(しゆく)してた一ノ瀬さんや、気難しそうで近寄りたかった薫さんや、攻撃的なぐらい素(す)直(なお)で圧倒されてた双葉君と、最近よく話す。仕事の反省点とかだけじゃなく、昨日見たテレビの内容とかの、なんでもない話もだ。

同様に本田さんもだいぶやわらかく変化した。とくにハルちゃんとは携帯番号を交換して、仕事帰りにもちよくちよく遊びにいつてる。

ハルちゃんは場の空気をあかるくして、他人のいい面を引きだせるムードメーカーなんだ。

「そうだ。坂見君も今度一緒に呑む？ 僕が本田君を誘っというてあげるよ」

え、でも、と言い淀(よど)んだのと同時に、「ハル！」と怒(ど)鳴(な)り声がぶつかってきた。薫さんだ。ハルちゃんの背後からシャツの襟首を引っ掴んで、カウンターのなかに引きずりこむ。

「サボってないでちゃんと仕事しろよ」

「こわいなあ～……嫉妬してるの？ 安心して、僕は薫が一番好きだよ」

「ふざけんな。一番ってことは二番がいるんだろ？ どうぞそいつと仲よくしてください、仕事が終わってからな」

「ごめん、薫だけが宇宙一好きです」

「ああ言えば、こう言うだな。作家センセーはくちが減らない」

薫さんの叱責が始まった。こうなると傍にいつらいので、僕は背後の棚にまとめてある返却されたDVDを手を持って、そうとカウンターをでた。

ふたりは“喧(けん)嘩(か)するほど仲がいい”の関係が確立していて、もはや店員のなかに焦ってとめたりする人は存在しない。

けんけん響く薫さんの怒鳴り声を聞きつつ、棚のあいだを移動していると、

「優太郎、俺にも半分ちょうだい」

と、本田さんに呼びとめられた。「あ、はいどうぞ」と渡したら、肩を竦(すく)めて苦笑する。

「あいつらのせいでカウンターに戻れなくなったよ。いまは客がいないからいいものの、痴(ち)話(わ)喧嘩もほどほどにしてほしいね」

あはは、と僕も笑った。視線をずらして、本田さんのエプロンの肩紐が黒いシャツの襟を押し潰(つぶ)してるのに気づく。

「本田さん、ここ」

右手をのばして襟を首のうしろから立てなおしてあげたら「ああ、悪い」と短いお礼を言われた。いえいえ、触(さわ)れて嬉しいんです、といたたまれなさを持ってあまして、彼の耳にかかっていた髪がパラと流れるのを見る。

きれいなストレートだからのばしっぱなしでも不潔(ふけつ)そうじゃない。まるっとした頭に天使の輪(りん)ができて、かわいい。……髪質も才能(才能)なのかな、なんてハルちゃんの言葉を振り返る。

「いつも思うけど、優太郎は学校終わってからバイトだから大変(大変)だろ」

棚にむきなおった本田さんが、空(くう)ケースにDVDを差し込んで戻(もど)していき、僕も同じように仕事しながらこたえた。

「本田さんのほうが、たくさんバイトしてて大変(大変)じゃないですか」

「高校生と大学生は違うよ。俺(俺)はいま大学のほうは結構(結構)、暇(暇)だし」

暇(暇)なら暇(暇)でコイビトと会うんでしょ、とからかおうとして……うまくできそうもないや、と断念(だんねん)する。返答(へんた)すらできずにDVDを二枚(にまい)戻(もど)したところで、本田さんが会話を繋(つな)いでくれた。

「天体望遠鏡(てんたいぼうえんきよう)の金は貯(たくわ)まった？」

僕(僕)がしたい話を、本田(本田)さんはわかってる。僕(僕)がなにを好きか、なにが大事(だいじ)か、ちゃんと憶(おぼ)えておいて、さらっと話題(わだい)にしてくれる。

こういう気配りができるからモテるんだらうな……。

「……はい。ちやくちやくと、貯まっていますよ」

「ほんとか～？ 無駄づかいして、貯まってないんじゃないの？」

肘(ひじ)で、つんつんつつかれた。

「む、無駄づかいなんて、しないでですよ。携帯電話の料金払うぐらいだし」

「え。友だちと遊んだり、服買ったり、えろ本買ったりしないの？」

「友だちとは学校以外であまり遊ばないから、服もたくさんは必要ないんです」

「相変わらず真面目でいい子だな、優太郎。えろ本は？」

「いい子とは違うでしょ」

「いい子だよ。で、えろ本は？」

肩で、どんと体あたりしてやる。

睨(にら)み返す自分の顔が真っ赤に染まっているのはわかってて、本田さんが顔をそむけて声を殺して「たのしい」とくっくっく笑うのが、悔しい。悔しいのに、お腹のあたりがそわそわすぐったい。

悪い人だ。優しくて気配り上手で、悪い人だ。

本文 p20～26 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>